No. 18
1996.8

あぶらむ通信

あぶらむの会発行
〒509-41　岐阜県吉城郡国府町宇津江
TEL.0577-72-4219

「ガンドルンの朝」　加藤　正　作

飛騨だより

'96年夏、梅雨明けと同時に強い日射しの日々、しかしその中にも赤トンボやコスモスなど、秋を感じさせる生きものたちがちりばめられている飛騨の短い夏です。皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。私たちあぶらむの里で生活している者も、一同元気にしています。しかし、その中にあって私の方は、少々元気不十分といったところです。原因は、「親の子離れ」をめぐっての頭とからだの葛藤にあるのです。

この春、進学のため下の二人の子供たちも家から出ていってしまいました。頭の中ではいやというほどわかっていたのですが、いざ誰もいなくなってしまうと心の中の空白感は大きく、からだ全体でこの現実をうけとめるまでには少々時間がかかるようです。「別離」、私たちはこうした小さな別れをいくつか体験しながら、やがて訪れてくる大きな別れにむけて、心の準備をして行くものなのですね。私にとっては始めてのよい訓練の一時です。しかし、このように十分に子離れできない私を憐れんでか、最近、あぶらむに沢山の子供たちが与えられ始めました。その第一陣が「子供から大人までのネパールの旅」に参加した子供たちです。

バブル経済のころ、あぶらむの里周辺でも、ゴルフ場やスキー場による地域開発が盛んにすすめられてきました。リゾート開発といえば日本列島ゴルフ場とスキー場の金太郎アメ、そんな中で自然と調和し人々の心や感性を、もっともっと豊かにするリゾートという世界があるはずと語ってみても、今日明日にすぐにお金になるものの力は絶大で、「こころ」などという言葉を口にするものは経済力のない敗者のたわごとでしかなかったのです。そのような中で'94年より地元の人々を中心に始まったのがネパールの旅、百聞は一見に如かずで、物質的貧しさの中にあっても限りない心の安らぎと癒しを与えてくれるネパールの地、その地を旅する中で私たち一人一人の心にどのような変化がうまれてくるのか、その事実の中から真のリゾート（心の安らぎと癒し）の在り方を考えてみたかったのです。そしてこの三月、地元の人々を中心に、11才の子供から60才の大人まで、総勢19名（現地参加の海外青年協力隊員を加えれば22名）による新たなネパールの旅が始まったのです。

最近、心のバランスをくずしたりしてあぶらむの里を訪ねる若者を見ていて思うことの一つに、自分で直接見て、触れて、感じてという「第一次体験」が極端に不足しているということです。彼らの中に見るのは、テレビや雑誌等を通してあたかも見たかのように触れたかのように思い込み、それを自分の体験としてしまう「第二次体験」のみに満たされている姿です。

この二つの体験のちがいはどこにあるのでしょうか。第一次体験はからだ全体を用いてそこでの経験をうけとめ、多くの時間をかけて消化されて行く全人格的な営みに

対して、「バーチャル・リアリティー」（擬似体験）という言葉に代表されるような第二次体験は、脳の片隅で短時間に処理されていく一種の情報処理のたぐいのものでしかなく、私たちの心に深く刻み込まれるようなものにはなり得ません。

私にとっての第一次体験は沖縄であり、ハンセン病を病んだ人々との出会いであり、また、フィリピンやネパールの名もない人々の日々を生きる真剣な姿でした。それらは全て真実なものであり、もし私がそれらを見なかった、触れなかったと、その事実との出会いを否定するならば、それは自分の人格を否定することになったでしょう。しかし、この出会った事実へのこだわりが、やがては未知なる自分の人生を手探りで歩むときの確かな道標となってくれたのです。出会ったそれらの人や出来事は、私の人生の師であり、ひながたであったのです。心のバランスくずしている若者と接して感じることは、彼らの中に人生のとっかりとなるこの「ひながた」（モデル）がないということです。第二次体験の中からは、私たちの未知なる人生の道標となるべきものは生まれてこないからです。

このような理由もからみ、第一次体験としてのネパールの旅が子供たちと共に始まったのです。

今回の旅の数ある出来事の中で、私に強い印象を与えたのは、荼毘に付される人を見る子供たちの真剣な姿でした。ご承知のようにヒンズー教徒は、人間は聖にして母なるガンジス川から生まれ、またそこへ帰って行くと信じています。荼毘にされた遺骨はそのまま川に流されます。彼らにとってはこの大地が墓であり、ガンジスの水と共に天にのぼり、再び雨となって大地にもどってくるという壮大な輪廻の世界の中に生きています。眼前で荼毘に付されている光景に子供たちの全身は硬直し、無言のままくいいるようにいつまでも見続けていました。人の生と死が私たちの手のとどかないところへ行ってしまった現在、子供たちはパシュパティナート寺院でのこの光景の中に、人が生きることと死ぬことをからだ全体で感じ始めていました。このような第一次体験が彼らの人生の肉となり血となって、自分の心を形成し、未知なる人生を一歩々歩む力となって行くことを、真剣に見続ける彼らの後姿の中に私は強く感じさせられました。

パシュパティナート寺院でダビに付される遺体・遺骨は川に還される。

さて、黙想の家、研修棟としての「諸魂庵」が落成して一年がたちました。290年余の時の歩みを刻んだ館、どこか人の心を優しく包んでくれるのです。その空間を十分に用いるまでには少々時間がかかるのが現状ですが、それでも多くの人々に心の安

らぎを与えてきたように思います。この六月には地元日赤看護専門学校生たちのトレーニングキャンプをひきうけました。「自分とむきあう」ことが一つの課題でしたが、私はそのために「瞑想」の一時を取り入れました。オーム事件によりこの瞑想という言葉に多くの偏見がもたれていることや、また、瞑想への若者たちの反応がわからず、プログラムの中に取入れることに躊躇した私でしたが、諸魂庵とあぶらむの里のもつ癒しの力を信じて取入ることにしました。「瞑想の時が一番素直に自分とむきあうことができた」という彼らの声に、今後の活動に対して大きな気づきと励ましが与えられました。今回はその声も紹介させていただきたく思います。

夏本番、どうぞ時節柄呉々もご自愛下さいませ。あぶらむの里訪問を皆様のご予定にお加えいただければ幸いに思います。スタッフ一同、皆様のおいでをお待ちしております。

1996年7月　盛夏

あぶらむの会

代表　大　郷　博

「ひとみ」

岡　田　明　子

私は、ネパールのどんなところにひかれたんだろう、と考えてみるとたくさんの「ひとみ」だと思います。パシパティナートの子どもたち、フルチヨキ学校のみんな・・・。暮らしも豊かではないのに、なぜみんな、あんなにいい顔なんだろう。なぜ「ひとみ」があんなに生き生きとしているんだろう。

パシパティナートで私と手をつないでくれた女の子がいました。そのとき私の心は、すごくやさしい気持ちでいっぱいでした。その子の心がつないでいる手からトクトクと流れているみたいな・・・。

言葉がつうじなくても心でつうじあえるってなんだかとてもすてきなことだと思います。みんなと心がつうじあえたら、戦争なんてなくなるのになあ、と考えたりしました。

さて、この作文の結末は、「私もネパールの子どもたちのようにやさしくなりたい」でも「ネパールの子どもたちのひとみに近づきたい」でもありません。これは単なる日本人のきれいごとになってしまうからです。

まぶしいほどに輝いているネパールの子供たちのひとみ、なぜだろう。

自分らしく生きてみたい、これが私の思ったことです。やさしくなりたいなんて、はっきり言って（書いて？）、私はやさしくなんてなれません。やさしいというのは、岩波国語辞典で調べると（笑）、「思いやりがあって、親切なこと」と記してありました。もし万が一私が「やさしく」なってしまったら、怒る・泣く・喜ぶ・楽しむの感情はどこへ行ってしまうのか？一生、人のために「やさしく」ならなくてはならないのか？

たしかに「やさしい」人は、人に好かれるけど、自分のために生きることはできません。その点ネパールの子は、無理に好かれようとしていないし自分らしく生きています。その生き生きしたひとみが語ってくれてやっとわかりました。

最後に私をネパールにつれていって下さった大郷さんをはじめいろいろな方と、ウペやアンカミやカールさん本当にありがとう。

『なんだ？なんだ？この子達はあ～！』

ポカラでの夜のこと。湖畔にある屋外レストランで、待ちくたびれた我らがグループの子どもテーブルでは、歌が始まった。

薄暗いとはいえ、（オイ！オイ！）と小心の私は思わず、あたりのヨーロッパ人を気にする。歌は覚え立てのネパールの歌で、替え歌も作って笑っている。

一緒にうたっているのは、塀の茂み越しにいる数人のネパールの子ども達。

食べ物をせがまれて戸惑いながらも、昼弁当の残りを手渡した後らしい。

昼弁当は、ゆで玉子とサンドイッチ。食べ残しても誰も捨てられずに持ち歩いていたのは、この国ではご馳走だという事を見て来たせいかもしれない。

もらって嬉しい、あげて嬉しい、、、と言う事なのか、ついでに心のやり取りなんかもしたようでとにかく面白そうにうたっている。

象にのってジャングルへ

（こんなことしていいの？、、、）ついつい考えてしまいそうな私を笑い飛ばすように、なんてさわやかなこの子たち。

理屈よりも心のものさしを使った方が気持ちいいよ　と、言われたみたいな、、、。

パシュパティナートでの火葬、羽をむしられて夕食になった鶏や丸焼きのやぎの事、水や食べ物で下痢の洗礼も受けた。

食べ物、宗教、暮らし、自然、、、どの場面でも日本にいる時よりも命が身近なこの

旅の中で、我らが子ども達はたくましかった。

自分達とはあまりに違うこの国のことを、面白がったり、驚いたり、戸惑ったり、時々、自分のことで精一杯状態に陥りながらも、その目をそらさないで見ていた。

最後の日には、カトマンドウの迷路のような雑踏の街に放し飼いにされて、全智全人格？を駆使した買い物。　さてお土産は？

たくさんの買い物と、思いでと、下痢の続き、それに気ずかずに心の中に落ちた"命の種（たね）"も、じっくり、じっくり　育つのが楽しみです。

やすこママ

「ヒマラヤの国から」

'95年度　青年海外協力隊　1次隊

派遣国ネパール　**大久保　嘉　久**

ナマステ（こんにちは）

私が協力隊の隊員として、ネパールに来て半年が過ぎました。半年にして、ようやくネパール人と同じ視線で物事を見る事が出来るようになりました。また、隊員としての活動もゆっくりではありますが動き始めました。

私は、現在２９才です。２９才のこの年が、こんなに躍動した年になるとは思いもしなかった事です。もし、あのまま飛騨の地にてなすがままに時に流されていたら、私は、視野がだんだん狭くなり、毎日酒を飲み、他人様に自分の不満を蒔き散らしていたでしょう。

ネパールに住んでみて、「生きる」と言う事は、「生きよう」としなければ「生きている意味」がないのではないか。などと考えたりします。私が生きようとする姿を他人が見て、私を助けてくれる。また私も他人を助ける。そこに和が生まれ、その和が大きくなっていく。この事が喜びとなりそして生きようとする力になる。

ガンドルンからみたアンナプルナ山塊

日本に居た時の私は、他人に操り人形のごとく生きていたような気がします。また私も操られる事を望んでいたのかもしれません。日本での私を取り巻いていた環境は、生きようとしなくても生きていける環境だったのかもしれません。ただしそれは、飯を食べ、息をしているだけの生活です。

なにはさておき、私にこの機を与えてくださった皆様、そして私のわがままを聞いて送り出してくれた両親、他、沢山にお世話になった方々に深く感謝します。

さて、ネパールでは「ビカース！！ビカース！！」とそこら中で言っています。「ビカース」の意味は「開発」です。今まで徒歩でしか行くことの出来なかった村にも、大型のブルトーザーが入り道を作っていきます。そして出来上った道には、自動車が通行し、人・物を運んで来ます。村人達は、外国人である私をめずらしがりおもちゃにして良く遊んでくれます。が、そこに自動車がやって来たなら私の人気は急降下、皆一斉に自動車をめざし急な坂道をかけずり上がります。大人も子供も、じーちゃんもばーちゃんも、車を取り囲み笑顔で車を見つめています。村にビカースがやって来たのです。とにかく皆、大喜びです。が、道を作る時にやみくもにつき進んだブルトザーは、いたる所で水道管を切断し、また車が通れるだけの道は雨が降ると土砂くずれを起こします。

村にはお金が流通し始め、昔ながらの生活は姿を消していっています。村では、道路、学校などの建設が行なわれ、住民は目に見えるビカースを喜んでいますが、本当に良いことなのか疑問に思いました。

「大きなビカースはやらなくても良い。トイレ改良かまどなど作ったらどうか？」と村長に言うと、「不自由はないから後」と返事が返ってきました。ネパールの人々に必要な物はなにか、考えさせられます。

私の仕事は、水道作りです。主な活動場所は村落となり、村人の生活を見る事が出来ます。協力隊ネパール隊員のＯＧが「物を作る事は簡単な事、でもその前の準備の方が大事」だと言っていました。少ない予算で水道を作る事は簡単な事ではありませんが、作る前に住民に基礎的な知識を教える事も私の仕事です。

村人のおもちゃである私が、ただのおもちゃで終わらぬよう、良く考え、村人と生活していこうと思っています。

黙想の家「諸魂庵」研修会

高山・富山　日赤看護専門学校研修より

先生、お元気で毎日を過ごしていらっしゃいますか？先日は大変お世話になりました。３日間ではありましたが、忙しい毎日を送っていた私達にとってこれ程リラックスし、かつ自分を見つめ直すことが出来たことは無かったように思います。帰ってからも何かが私達の中で生き続けているようです。

私達は先生から多くの事を教えられました。まず一つ目は自分というものの存在です。「自分の事は自分が一番良く知っている」と思っていました。そして、「じゃあ、

その自分がよく知っている自分を出してみなさい。」と言われたとき、「これ程難しいものはない」と思いました。思ってはいるものの、形で表わせと言われると、どうすればいいのか分からない。もしかしたら、自分が一番良く知っていると思い込んでいただけなのかもしれないと思いました。結局今でも、自分とは何かという事がはっきりと分かっていないのではないかと思います。しかし、瞑想の時間が無かったら、きっともっとあやふやな事になっていたと思います。最初は、「瞑想？話とかしていたほうが楽しいかも・・・」と思っていました。しかし、こんなに多くの人がいるのに、瞑想している時は、いつも以上に自分のことをゆっくりと振り返り、自分を出せたことに驚いています。そしてこんなにリラックスすることも・・・。これから先、疲れた時、嫌な事があった時などは特に自分自身を見つめ直し、一日一日を大切にしていきたいと思わされました。

二つ目は、いろいろな視点から物事を見て、その人の気持ちになるということです。実際、目が見えなかったらここまで大変なのか、言葉が話せなかったらこんなにつらいものなのか、また、心と心の触れ合い、そして改めて非言語的コミュミケーションの大切さを教えられた気がします。

たった3日間ですが、私達にとってこれ程のんびりとありのままの自分を出せた3日間は無かったように思います。

また、おいしくバランスのとれた食事を作ってくださったり、実習のサポートをして下さった奥様、そしてスタッフの方々に深く感謝すると共に、簡単ではありますが、御礼状とさせていただきます。

またお逢いできる日を楽しみにしています。

富山赤十字看護専門学校二年生一同

あぶらむの里の研修では、大変お世話になりました。三日間大自然に包まれ、まるで時が止まっているかのようなゆったりとした空間の中で、安らぎを感じる事ができ幸せでした。研修の目的であった”心をゆるめる”は、みんなの表情を見ていると、達成できたように思われます。心をゆるめると、素直な自分が出せ、ぎこちない友達関係も、するっと自然に会話が出来たりして、それがうれしくて心が暖かくなっていきました。でも、何が私達をここまで変えてくれたのかを考えると・・・

自然がそうさせたのか、瞑想がきっかけとなったのか、はたまた先生のお話が心に染みたのかよく分かりませんが、とにかく、あぶらむの里のすべてが私達の心地よいベットのような感じでした。だから安心して心を開くことが出来たのかもしれません。

時間に追われる日々の中でも自分を見失わず、あぶらむの里の自然のような潤った心でいつも患者さんを受け入れる事ができるようになりたいです。

三日間、本当にありがとうございました。

高山赤十字看護専門学校二年生一同

高山日赤看護専門学校
教　師　**牛　丸　久　里**

学生に便乗して図々しく、私の個人的な思いを少し書かせて下さい。

研修前の学生達は、看護過程（どのように看護してゆくかを考慮する学習）のGWと、定期的なテストでストレスが高くなっていました。

ストレスはある程度人間の成長には必要だと言われます。でもそれはストレスがあってもうまく解消できたり、ストレスがバネにできる場合であって、それができない人には苦痛で害になることも言われます。

私は自分の学生時代と比べてみると、今の学生達は中学・高校も含め受験時代を勉強～勉強で過ごし、リラックスの方法がうまくつかめないでいたり、その仕方が不十分なように思えます。そしてその状況の中で、看護の勉強は学生のストレスを更に高くする要素が多分にあると思います。

視覚もなく、言葉もなく、無言のうちに思いを伝えよう“めかくし探康”実習

これに関連した話でつが、先日古川で椎名誠さんの講演がありました。その中で「日本人はみんな頑張るという言葉が好きだけど、頑張るという言葉は『カタクナニツッパル』こと。日本の歴史をみてもその考えが一貫してながれている。そんな中、今の若者は息をするのも苦しいくらいの日々を過ごしているのじゃないかなあ。そこで人はそれぞれ、自分でリラックスする方法を見つけると良い。」といったような内容を話されていた。

私はこの『リラックスする』ことはとても大切なことだと思います。

私や主人が“あぶらむの里”が好きなのは“あぶらむ”が自然の中にあり、建物すべてがゆったりとして遊びや余裕のある空間があり、更にそこに大郷先生や奥様・スタッフの方の、物・人を問わず、大切にゆったりと向かい入れて下さる姿があることで、その自然で堅苦しくない雰囲気が訪れる人の気持ちにゆとりを与えてくれ、その

中でふうっと一息つけるからだと思います。私自身はいつも“あぶらむ”へ行くとリラックスできて気持ちが楽しくなるのです。

そんな自分の体験から“あぶらむ”へ行けば今のこのストレスの高い学生達もリラックスでき、そこから何か自分達なりに活路を見つけだせるのではないかと思っていました。

トレーニングセンター研修前の説明で「勉強道具は持っていかない研修ですよ。」と話しても「どんな内容の研修なんですか？」「どんな勉強するんですか？」と不安気に何回か聞いてきた学生達。

情報化時代に生きている学生達が、テレビがなくポケベルを使うのにも不都合がある、建物も昔風の家での研修をどう思うのか、また自己洞察・啓発をめざす体験学習研修をどの様に受けとめるのかと、期待する反面、不安も持っていましたが、研修が終わり学生の生き生きした顔を見た時に本当に研修にきて良かったなあと心から思いました。

先生が言われたように、自然は人の心をいやす働きがあるのですね。

人工的な直線（例えば机が並ぶ教室等）の中にいた学生達が、自然の緩やかなウェーブ（曲線）の中でストレスを和らげている様子がうかがえましたし、外を眺めていたり瞑想の時間等に経験したように、目でとらえるものが多いほどそれにとらわれがちですが、目でとらえるものが少ないほど自分自身の心を見つめる時間や機会が、学生達に多くあったように思われました。

今回の研修のようにうまい物、うまい空気、うまい時（時間・空間）を味わうと、人は心が楽しくなる、いつのまにか自分の中でかたまっていた‘しこりみたいなもの’がとれ心がやすらぐ、あたたまる。『今の自分でいいじゃないの、あるがままに生きていこう』なんて思ったりする。

私は自分と静かにゆっくり向き合った時に、初めて解放される自分があったなと、そんな経験をしましたが、それはまた学生達も同じではなかったかと思います。

そして更に学生達はもう一つ、今の生活の中でうまくできていなかったリラックスすること、自分を緩和させる方法を知ったようにも思います。

これは学生達にはとても大切なことで、何故かというと看護を学びめざす人には今後いくつかのストレスフルな状況が予想されるからです。

私は今回の経験を経て、学生達がストレスフルな状況時にリラックスする方法を自分なりに見つけて、うまく切り抜けていく力が一つできたように思え、それだけでもこの研修の意味が十分あったなあと思います。

一年間ボランティアを終えて
「自由に」

'95 '96年度スタッフ　長田 まどか

高校の時、中島敦の「悟浄歎異」を読んで以来、そこに描かれていた「悟空」と「悟浄」の二つの人物像がいつも私の心の中に大きく存在する。ひとつは憧れの対象として、もうひとつは自分自身のかたちとして。悟空というのは、自分の内側に育ったものが自然に言葉や行動となって現われてくる、「この上なしの・とことんの・本気」なヤツである。しかし悟浄の言動は、すべてが格好付けのポーズだ。そして悟浄は、悟浄であることに満足せず、悟空に近ずきたいと願うが、どこかで悟浄でいることに安定感を覚え、それからぬけだすことができない。

私は悟浄であった。自分に自信がない。100%の力を出して、何かをやったことがない。何をするにも、本気で取り組んだのに失敗してしまうことが怖くて、やってみればたぶんできるだろうと自己の能力を過大評価しておいて、本気でやっていないからこの程度しかできないんだと言い訳をしながら生きてきた。

私は実際今までどういう人生の道を歩んできただろう。大きな人生の岐路に立たされたことは2回あった。仕事を決めるときと、仕事をやめようと決めたときだ。どちらの場合も、道は、逃亡に極めて近い挑戦、いや挑戦に極めて近い逃亡により決まったと思う。仕事を決めるときは、自分の感じた科学のおもしろさを人に伝えられたらという気持ちを持って、教師になることを選んだが、実は、専門を生かした研究に本気で携わり、仕事としてやって行けるかどうかの不安の方が大きかったのではないだろうか。教師をたった2年でやめようと決めたときは、今の受験が絡んでくる教育とは違う、自分自身で納得の行く教育スタイルを見つけ、いつか小さな学校をつくるために、ちょっと回り道をしてみようと「一年間ボランティア計画」への参加を選んだのが、本当は、知識も表現力も乏しく、ハッタリもきかないのに教壇に立っている自分が怖かったことの方が大きかったのではないだろうか。カジッてはやめ、カジッてはやめというこの道のりは、明らかに自信のなさの表れである。そして障害を越えられるか、越えられないか答えが出る前に迂回してしまうのだ。そうすれば、少なくとも本当に越えられなかったという結果は出てこない。

そのくせ、自分はちっぽけな人間ではないと思いたく、「どう生きるべきか」と理想を掲げて生きていた。私はどう生きたかったのか。大学で生物を学んだとき、DNAのつくりとしくみの美しさに魅了され、生まれて始めて「創造主」の存在を感じた。それから、我々ヒトはなぜ発生させられるに至ったのか、その創造主の意図をさぐり、

その意図にそって研究をしていきたいと思った。生き物は神秘である。だからそれを分子、細胞、個体等のレベルで解明していくのは単なる科学の「形」であり、それに取り組むのに本当に大切なのは、学問的興味だけでなく、純粋な科学の「精神」だと思った。そして、それは生き方の「精神」にもつながると思い、「創造主はなぜ？」と繰り返し考える、それが私の生き方の基本であった。問題なのは、それにとらわれすぎていたことだ。その理想をもって現実に起こる問題を解決しようとしても、もちろん時間がかかる、だからあせる、そしてその力もない、またあせる、そうしていったん別の道へと逃げるのだ。明らかに逃げるという敗北感を感じつつ、しかし新しい道を求める自分はチャレンジャーなのだと言い聞かせて、気持ちをごまかしてきたのだ。そんな私は、不自然に、かなり危険なところに危険な状態で立っていたのだろう。

しかし、このあぶらむでの生活の中で、それに気づき、私は変わった。すべてにおいて中途にあった自分を、ゼロにもっていくことができるようになったのだ。このゼロというのは上手く言えないが、段階的なゼロではなく、位置的なゼロというのだろうか。一から始めてみようという感覚ではない。なまじ70や80であることに優越感を持たなくても良く、20や30であることに劣等感を持つこともなく、自由であり、開けている位置という感じのゼロだ。（事実私も、一般社会で仕事を続けられなかったことの劣等感と、レールを外れることのできる人間であるということの優越感をいだき続けていた。）とにかく私は、とらわれるのをやめ、解放されて楽になった。

「自由に」

なぜそうできたのか。理由はどうあれ、今までのレールの上の人生で築き上げた財産を捨て思い切って飛び出したこと。そして、単なる空間として評価することのできない、人が変わって行くための多くのファクターをもった「あぶらむ」がそうさせてくれたことはまちがいない。そうして、「生活する＝生きている」という私に適した生き方が与えられたのだ。

特に、日々の生活の中で「農作業が好きだ」と感じるときが幸せだ。私には、収穫の喜びよりも、作物が成長していく過程を見守る喜びの方が大きい。移動することができないが故に、彼らの獲得した生きていくための手段は逞しく、種によってさまざまなスタイルは、ほれぼれと見とれてしまうほどに美しい。植物に接し続けていれば、いつか宇宙の真理さえも見えてくるような気までする。「宇宙の真理」（創造主はなぜ？と変わりはないが。）それを追求することが、今のところの、もしかしたら永遠の私の生き方のテーマなのかもしれない。生き方のテーマがこのように抽象的だと、

きっと行き着く先もはっきりしたところではないだろう。でもその方が、結果よりも過程を楽しめる。だから、今は高らかに理想を掲げて何かを行なうより、「あれをやってみたい」という単純で小さな自分の気持ちを信じてとりくみ、葛藤をくりかえし、迷いながら漠然としたところにたどりつきたいと感じる。

あぶらむに来てから、人間的に大きく成長したということは全くない。できるようになったことは、ただ一つ、厳しく自分をチェックし直し、優しく自分を認めることだ。土に汚れた指、額に流れる汗、それを吹き飛ばす畑をわたる風、黒いTシャツを着たときに感じる光のエネルギー、高いところから低いところへ正直に流れてくる水、それをまた高いところへ引き上げる植物の営み、きっとすばらしい物が中にいっぱい詰まっているのだろうと思わせる土、そういったものとともに生きていることを幸せだと感じる自分が大好きだと思えるようになったことだ。

悟浄は悟空を見て思う。「自由な行為とは、どうしてもそれをせずにはいられないものが内に熟してきて、おのずと外に現われる行為の謂だ。」捨ててしまった財産を取り戻したくなるときは今でもあるが、やっぱり私は今の生き方に還って行かずにはいられないだろう。それが私なりの生き方だから。いつまでも自由に。

晴れた日に、寝転がって遠くを眺めたら、
いつもと違う角度で見たこの世界が、
不思議な広がりをもって、オイラの中に
飛び込んできたらしい。
　　そうして・・・
訳けの分からないものに囚われるのはもうやめようと
　　思ったら、
いつもと同じ、変わらないこの世界から、
オイラにとって、オイラなりのナチュラルな生き方が、
プレゼントされたらしい。
　　そうだ。
幸せはきっと自分の力で獲得していくものなのだろう。
そうすればきっと周りが与えてくれるものなのだろう。

あぶらむの里にて

寄付者一覧（７月24日現在）

磯貝　澄美子／豊里　正子／杉山　千鶴子／菊地　栄三／河野　正司・マリ子／富永　隆司・敦子／新田　忠雄／木田　献一／本田　欣哉／長間　四郎／矢後　和彦・正子／味岡　努・敏江／柳川　ハル／岩名　佐智子／弥永　昌吉／渡辺　隆／池田　秀直／横浜聖クリストファー教会／鎌田　玲子／小松　英樹／武澤　信子／佐倉　淑子／大嶺　佐智子／本間　勇吉／窪寺　俊之／野村　浩一／松戸聖パウロ教会／田中　雅子／大平　途生／畑井　正春／葛飾茨十字教会／荒木　汐／沢田　京子／太田　精一／荒川　紀子／山崎　俊樹／渡辺　多茂夫／鈴木　茂男／寺田　信一／吉田　茂晃・優子／轟　綾子／島谷　晴朗／飯島　匡夫・睦子／増山　文子／形部　賢／原川　恭一／一丸　直也／岸井　孝司・ミツ子／久保田　順／岡登　正子／安斎　勇夫／加倉井　佳子／水野　洋子／京都復活教会／櫻井　淳司／島田　信弥／一柳　百／屋良　朝夫／岩田　牧夫／武原　春美／唐木田　麻起子／志賀　直子／梶原　恵理子／伊東　勇／松島　理恵／立教高校ＳＰＦ実行委員会／島　十三男／柴崎　妙子／平良　千代／宮城　タケ／大城　ツル／徳田　その／神島　洋二／泉　朝仁／山城　ハル／猪野　愈・眞倫子／武田　宏／鴨下　至治／桜井　忠弘／後藤　秀治／常見　幸代／木村　きく／下畑　幹／工藤　真喜子／原　好夫／掛川　尚子／山口　千尋／外谷　寿人／池崎　純一／菊地　卓大／高澤　芳子／祈りの家教会／紅林　光子／豊見城聖マルコ教会／尾針　恵子／菅野　和子／福田　詩郎／佐々木　亜子／加藤　真理子／青木　信之／母と子を守る会／松本　信代／小林　賢三／東京聖テモテ教会奉仕会／橋本　禮子／瀬川　信子／坂本　吉弘／加藤　博道／嘉数　弘子／竹田　純郎／荒木　譲／斎藤　慶三・友子／豊見城聖マタイ教会／岩間　光雄／キリスト教教育同盟関西地区聖書科研究会参加者一同／高橋　宏幸／田口　清吾（敬称略．順不同）

新規会員（７月24日現在）

〈正会員〉 近藤　弘・道子／金沢　克子／加藤　真知子／松田　剛／高橋　敬太郎／原　博明／大八木　米子／上村　誠／八野　豊／棚橋　忍・美江／西田　修・勝子／刑部　信子／岩佐　博／沼尻　春代／杉下　みどり／江見　淑子／福留　史郎／杉本　良平／唐木田　麻起子／折本　和洋／佐々木　亜子

〈賛助会員〉 小瀬　典明／音村　一郎／今村　彰宏（敬称略・順不同）

今後の主な行事予定

10月９日～13日	沖縄愛楽園の皆さんあぶらむの里訪問
10月26日	武久源造チェンバロコンサート （ルネサンス　バロック　チェンバロ名曲）
11月２日	諸魂記念式
11月１日～17日	陶と食の出会う会　水谷靖　あぶらむ個展